

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	井竿 富雄 (いざお とみお)
	<p>九州熊本出身です。なんとかここまで生きてくることができました。どうにか生きてくることができたことは確かに不思議なことであると思っています。</p> <p>政治史などやっていると対象にした政治家に似てくると申しますが、私の場合、やっている対象と全く対極的な生き方をしていることが多くて、これはなぜなのか分かりません。</p>		
担当科目	比較政治特論、国際文化学研究法		
<p><b>やってきたこと</b></p> <p>専門は政治史です。「シベリア出兵」という妙な戦争についての研究が私のスタートラインでした。この大学の隣に眠る寺内正毅元帥（首相・伯爵）が、一世紀前にこの戦争を始めました。最近、山口県に一大拠点があった花田仲之助という軍人（鹿児島出身）の率いる戦前の道徳教育運動「報徳会」のことを追いかけてみたり、防府と台湾の縁から台湾で阿里山の山中を歩いたりしています。なんとも不思議な世界にいます。</p> <p><b>院生志望のみなさんへ</b></p> <p>やってみようと考えたら、その思いが冷めないうちにまずは資料請求などで探索を始めてください。どんな勉強ができるのか、何が得られるのかをしっかりと確認したら、あとは飛び出すだけです。大学院は、年齢も職業も国籍も飛び越えた空間です。親子ほど年の離れた人達が対等に研究者として議論をします。自分はということがやりたいのか、そこをしっかりと考えてください。</p> <p><b>最近書いたもの</b></p> <p>世のトレンドにはあまり波長が合っていません。それをなんとなく誇っているかもしれない自分も反省しきり。最近が多忙を理由にさぼり気味です。</p> <p>「山口と台湾、相互インバウンド観光のおさそい」『つなぐ・つくる・こえる 山口のあらたな光を観るために』（共著。編著者は岩野雅子・齊藤理。共著者はほかに安溪遊地、辻田昌次、豊田滋、張玉玲、園田純子、金恵媛、渡邊克義、Delakorda Kawashima Tinka、西脇靖洋、岩下明裕、尹ヨンヒョク、Adam B.Seligman）山口県立大学ブックレット「新やまぐち学」第8巻、83-98頁、2018年3月</p> <p>「報徳会の日常的組織活動」『山口県立大学学術情報』11号、2018年2月、1-14頁。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	稲田 秀雄 (いなだ ひでお)
	<p>京都市に生まれ、祇園祭など多くの祭礼や芸能を見ながら育ちました。古美術（仏像など）にも少年の頃から関心があり、能や狂言に興味をもったのは、彫刻としての「面（能面・狂言面）」を通じてです。</p> <p>今や仏像ブームとなっていますが、仏像をはじめとする古美術鑑賞は、現在も趣味として続いています。また、自分の足で「歩くこと」も好きです。特に山口の町中は大いに歩く価値がありますね。</p>		
担当科目	日本文化特講Ⅰ、総合実習（担当代表）		
<p>私の専門領域は、日本の代表的な芸能（演劇）であり国際的にも評価の高い（ユネスコの無形文化遺産として登録）、能・狂言です。今までは、特に狂言の作品研究を中心として研究活動を行ってきました。現在は、山口市に伝わる鷺流狂言の系統的研究に力を入れています。</p> <p>山口の鷺流狂言は、山口県指定無形文化財第1号で、全国でも珍しい鷺伝右衛門派の狂言を今に伝えています。新潟県佐渡市にも鷺流狂言を伝える団体がありますが、こちらは同じ鷺流とはいっても、山口とは系統を異にしており、台本や演出にもかなりの違いがあります。私は山口鷺流狂言保存会の顧問を務めながら、保存会の活動に研究者の立場からさまざまに関わって参りました。2015年2月には、米国ケンタッキー州のセンター大学での保存会初の海外公演に同行し、解説を担当しました。今年（2018年）9月には、佐渡鷺流・高志狂言（佐賀県神埼市）も出演する、明治維新150年記念・鷺流狂言特別公演が野田神社で開催され、パンフレットの執筆や当日の曲目解説を行います。</p> <p>「日本文化特講Ⅰ」では、この山口に伝わる鷺流狂言をとりあげ、狂言の歴史や性格に関する概説から始めて、おもな演目の台本を読みながら、鷺流の特色を明らかにすることで、鷺流狂言の価値と歴史を理解していただくことにしています。その上で、こうした地域に伝承される芸能の保存や支援のあり方についても考えていただくこととなります。</p> <p>また、「総合実習」は、学生自らが地域（国際）社会に出かけ、様々な現場のエキスパートから地域づくりや地域文化の再生・創造活動について学ぶ科目です。どのような現場に向くかは、履修者の選択に任されていますので、指導・担当教員とよく話し合って、有意義な実習にしていきたいと思えます。</p> <p>豊かな歴史と文化の根付いた、この山口の地で、日本（地域）文化について、皆さんとともに語り、学び合えることを楽しみにしています。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	林 炫情 (イム ヒョンジョン)
		<p>韓国ソウル出身です。留学で来日し、あしかけ 20 年となりました。趣味はフラワーアレンジメント。国家資格も持っており、定年後の夢は花屋です。</p>	
担当科目	言語文化特講 III 「韓国・朝鮮言語文化論」		
<p>研究テーマは、社会言語学と第二言語習得研究。</p> <p>比較文化の観点から日韓両言語の共通点と相違点を取り上げながら、呼称研究を中心に相互理解と円滑なコミュニケーションを目指した異文化コミュニケーション研究をやっています。お互いを呼び合うときにどのようなことばを選択するかは、両者の間にどのような関係が成立しているかを表す指標となります。このような発話における言語選択は、社会環境の諸特徴を表象しており、対面的な相互交渉下で如何に行動するかを左右するルールとも通じ合っています。そのため、日韓両言語の呼称選択の仕組みを明らかにすることは、両言語社会における習慣や社会通念およびそれを支える文化背景の違いの究明につながるものと考えます。</p> <p>授業では、韓国社会における言葉と文化の諸様相を見つけ出す視点の確立を目指しており、社会学及び比較文化学の観点から、韓国・朝鮮語に特有の表現方法を取り上げ、そのことばの背景に広がる韓国人の暮らしと文化を多面的に探求しています。</p> <p>◆みなさんへのメッセージ</p> <p>「学んで思わざれば則ち暗し。思うて学ばざれば則ち危うし。」</p> <p>自分なりの問題意識をもって、その解決に関連づけて考えながら知識を学ぶことの重要性和、体系的な知識の大事さを指摘した論語のことばです。まさに、自らの目標を設定し、自ら計画を立てて研究を進めることが、大学院生の学びの姿だと思います。問題意識をもって、学問に取り組むことにより、学んだ知識が断片の集合体でなく、応用力の高い知識体系として身につくと確信します。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	岩野 雅子 (いわの まさこ)
	<p>日本国際文化学会で文化交流創成コーディネーター (Intercultural Coordinator) 資格認定制度の普及に取り組んでいます。文化と文化の間で起こる様々な課題の解決や、異なる文化の組み合わせから生まれる新たな文化的価値を提案する力を身につけてみませんか。</p> <p>大学院生には厳しいことを言いますが、精密さをもちつつ、論理的かつ創造的な議論ができる院生との授業は張り合いがあります。</p>		
担当科目	多文化教育論		
<p>大学院修士課程の二年間は、一年目にさまざまな科目を履修する時期と (コースワーク)、二年目に修士研究に没頭する時期 (リサーチワーク) からなります。学部からの進学者に加え、働いている方や、退職前後の方、次のキャリアを考えている方には3年以上ゆっくりと学べる長期履修制度もあり、一つの科目を隔年で昼夜交互開講しているので、学びやすいと思います。大学院での豊かな時間と空間をぜひ体験し、人生の糧にさせていただきたいと思います。</p> <p>「人生 100 年時代」と言われる今日、3つの無形資産をもつことが必要だと言われています。第一は、生涯にわたって知識やスキルや仲間、経験、教育などを増やす「生産性資産」。第二は、いつまでも肉体的・精神的幸福感を持ち続ける「活力資産」。第三は、いつからでも新しい経験にチャレンジして、自分の新しい面を見つけて加えていく「変身資産」。これは、『ライフ・シフト 人生 100 年時代の人生戦略』(東洋経済新報社、2016 年発行) で注目を集めたイギリスのリンダ・グラットン教授の著書に書かれています。</p> <p>若者、社会人、留学生などの多様な人々が交わす意見や、多くの教員から受ける助言が、目の前をパッと開いてくれることがあります。大学院生として挑戦した数々の事柄を思い出として積み重ね、最後に味わう満足感・達成感が、修士号という称号とともに、みなさんの自信となり、生涯の支えとなってくれます。</p> <p>「多文化教育論」では、多民族・多文化社会の登場と発展について、日本をはじめ諸外国の事情をみていくなかで、グローバル社会を生きる人間に必要な能力、資質、姿勢や態度、それらを育てる素材や機会、環境整備などについて考察します。多文化教育、国際教育、地球市民教育、グローバル教育等の領域を中心に、子どもから大人までの教育 (トレーニング) について広い意味で取り扱います。教材や教育機会など、多様な媒体を通して人の文化化のプロセスを追い、「変容」につながる転機 (turning point) をいかに用意すべきかについて考えます。</p> <p>月に一度開催される山口国際文化学会や、日本国際文化学会で大学院生が集まる研究交流集会、研究テーマに沿った学会参加などを通して国内外で学ぶ多様な人々と出会い、ぜひ新たな世界に足を踏み入れてください。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	ウィルソン エイミー
-----	---------------------	-----	------------



国際文化学部で受け持っている授業（聴講できます）  
実践英語、ディベート、現代社会論、欧米社会論

研究分野：  
社会心理学、異文化比較、教育社会学

具体的な研究内容：  
日本とハワイの百歳研究、日米の子育てや価値観形成に  
ついての研究

担当科目	国際文化特講 III 生命と生活の質特論
------	-------------------------

### 大学院生さんへ期待すること

国際文化特講 III では、欧米文化を取り上げながら、異文化理解や異文化比較に注目します。教員からの情報提供をもとにしたクラスディスカッションを繰り返しながら、最後に学生からのプレゼンテーションを行うといったプロセスで授業を進めます。できるだけ双方向的な授業を目指していますので、質問と好奇心をたくさんもって、自分から問題提供をする姿勢で受講していただきたいです。私はティーチャーではなく、学生の主体的な学びを促進するファシリテーター（進行役、まとめ役）という役割を果たすように努めています。

### これまでの研究活動

- 1) アメリカと日本の子ども（11歳から18歳）の価値観形成についての比較研究で、アメリカのサーチ・インスティテュートで開発されたアンケート調査を活用した、日本の子どもの「発達資産」の在り方について研究しています。
- 2) 15年前に、アメリカ人高齢者の生きがい感を調べ、日本人の生きがい感と比較しました。現在は、ハワイ在住の日系アメリカ人を中心にハワイ張高齢者（80歳以上）の健康の秘訣と社会活動、サポートネットワークについて調べています。
- 3) CLIL(Content and Language Integrated Learning)を利用した英語教育や TESL(Teaching English as a Second Language)について研究しています。

所属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏名	川口 喜治 (かわぐち よしはる)
----	---------------------	----	-------------------



担当科目	言語文化特講 I (中国文化論)、国際文化学研究法
------	---------------------------

### 本学の大学院生を目指されるん皆さんへ期待すること

文化的な視座から、「異」とはどういうことかを理解し、それを研究や修了後の人生に役立ててほしいと期待します。「異」とは、他者が自己とは違っているという一方通行的なことだけを意味しません。「お互いに違っている」つまり双方向的なことなのです。「他者が自己と違う」ことを理解したとき、とりもなおさず、「自己が他者と違う」ことを理解したのであり、それこそが自己の新たな価値の発見や自己に対する反省へとつながるのです。当たり前のことを書きましたが、このような前提で、様々な文化的分野から「異」の実態を学んでいただき、実社会で出会ういろんな局面に活かしていただきたいと、私は期待しています。

### ■これまでの私の研究活動

私は、これまで中国の数千年の歴史の中で古典詩(漢詩)が最も栄えた唐王朝、中でも盛唐という時期(710~765年)の詩人の作品と伝記を中心に研究してきました。盛唐には、皆さんご存知の杜甫や李白といった大詩人が出ましたが、大物は避けて、その周辺の詩人、国境を舞台とした作品に代表される雄々しい作風の高適(こうせき)、山水田園の美を清らかに描き出した孟浩然(もうこうねん)、精緻な人物描写が特「異」な李頎(りき)を主な研究対象としてきました。雑駁でまとまりありません。作品や伝記資料を通じてそれらの詩人たちと対話を試みしていますが、なかなかうまくゆきません(痛痒い感じです)。でも彼らの古典詩から現代社会を見たときに、気付かされることもたくさんあり、それは私にとってたいへん楽しいことです。

### ■ゼミの様子

本研究室初めての修士号取得者は、本学からの進学者です。彼女は、中国古典小説に描かれた「狐」について研究していました。ゼミでは一緒に四苦八苦しなながら、「狐」にまつわる様々な小説を原典で読みました。この指導の機会がなければ、私は「狐」文献をこれほどまでに読むことはなかったでしょう。また「狐は狡賢い動物」という私の常識的な「文化」(通念)に反省を与えてくれました。その意味で、たいへんありがたい指導をさせていただきました。

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	金 恵媛 (キム ヘウォン)
		<p>アジア地域におけるアクティブ・エイジング (Active Ageing) 社会の実現に向けた学際的な取組みに注目しています。</p>	
担当科目	国際文化特構Ⅱ		
<p>大学院の講義では、アジアのなかでも韓国の社会文化を主題に講義と受講者との議論を行います。韓国を対象地域とする研究はもちろんですが、多様な地域や社会現象へ関心を広げ、社会文化的な考察に関心のある方を受講者として想定しています。</p> <p>異なる地域や研究領域からの視点が幅広い関心に結びつくことが期待されます。韓国や日本をはじめとする多様な地域社会文化についての研究関心をもつ方々が学びの輪を広げて、研究を深めていく場としてご活用いただきたいと思います。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	倉田 研治 (くらた けんじ)
	<p>Web、GIS（地理情報システム）、写真表現などメディアに関するデザインや表現に興味を持ち、研究や創作をしています。</p>		
	担当科目	文化創造特講 I	
<p>メディアの持つ様々な領域・機能を理解しながら、横断的に活用することも含めて、表現や利用方法について研究しています。「誰に」、「何を」伝える（表現する）のかという本質の部分と向き合った上で、メディアの機能である「どのように」へと考察を展開します。</p> <p>コンピュータ、Web 上での制作とともに、地域文化を活用した取材などのフィールドワークも重視します。日常や身近なところにも、発見やひらめきのきっかけが潜在しているからです。</p> <p>近年、情報を伝達するメディアは次々と変容していきますが、移り行くことの中から不易流行を見きわめること、固定概念にとらわれず様々な角度から試みるという姿勢をもって、研究・制作に取り組んでいきましょう。</p> <p>また、デザイン、アート、テクノロジーなどの分野にまなざしを向けることで新たな発見や研究領域に展開が生まれることを期待しています。</p>			

所 属	国際文化科学研究科 国際文化学専攻	氏 名	斉藤 理 (さいとう ただし)
		<p>山口に暮してつくづく思うのは、山口県の都市機能分散型の（大きな中心都市を持たない）構造は、地方分権の国ドイツの形態に似ているなどと思っています。かの地では、小さいけれどもそれぞれに文化的魅力が詰まった都市が分散しており、これらを一つ一つつぶさに比較しながら観る面白さがあります。ことほど左様に！、まさか山口県でその愉しみを味わえるとは思っていませんでした。目下、週末ともなると、山口県の個性的まちまちを観て歩くことを楽しみにしています。もちろん、山口の新鮮な食と共に。</p>	
担当科目	文化遺産論		
<p>近年、「世界遺産」の話題がメディアでも盛んに取り上げられたり、また日本国内においても登録文化財制度が定着しつつあることによって、歴史的な遺産に対する興味関心が随分と高まってきています。先人たちがこれまで築き上げてきた文化的遺産の数々に眼を向け、その維持・保存、さらに活用に関する議論が高まることは、私たちの身近な歴史の継続性、地域文化の継続性という点できわめて意義深いことだと思います。</p> <p>このような潮流のなかにあって、文化遺産の活用法を「観光交流」の促進策と結び付けて考えていくことが、今後とりわけ重要になってくるのではないかと考えています。山口県もその例の一つですが、日本の地方では人口減少・高齢化が加速度的に進行しています。このまま状況が推移すると、山口県では15年後～20年後には多くの地域で、まちや集落が現在の半分のスケールに縮んでしまい、地域社会の維持、いわんや文化遺産の維持が難しくなってくるのです。山口県を旅すると、日本の原風景とも言える牧歌的な自然風景や歴史的に濃密な街並み、明治維新前後の時代を中心とした優れた近代遺産を目にすることができますが、もしこれらが次第に失われていくとしたら、わが国にとって大きな文化的損失であると言わざるを得ません。</p> <p>そこで、これまではバラバラに考えられていた文化遺産保護の領域と、観光の領域とを知恵を絞りながら効率よく連関させて、地域社会を維持するだけでなく、これらをより魅力的にしていこうと様々模索しています。具体的には文化観光を通し交流人口を増加させたり、文化遺産を利活用しながら「観光まちづくり」を促進したり、地域住民が地域内の文化遺産を見学するという「コミュニティツーリズム (community based tourism)」を促進し、地域に対しての誇りや愛着を創出するなど、色々な手法があります。</p> <p>わたしの講義においては、上のような社会背景を十分に認識し、文化遺産の価値を見出す眼を養い、さらに将来への適切な提案ができる能力を習得して欲しいと思っています。多くの皆さんに参加いただき、多種多様なアイデアが生み出されていくことを期待しています。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	進藤 優子 (しんどう ゆうこ)
	<p>専門は国際経済学です。経済学は難しいという声をよく耳にしますが、経済学の基本的な考え方を理解し、現実の経済問題を考えてみると、今まで見えなかったことが見えてきます。</p> <p>教員になる以前は、国際開発の業務に携わっていました。将来 NGO、政府機関あるいは国際機関などへ就職を希望している方がいましたら、できる限りお手伝いしたいので、ぜひ研究室へ足を運んでください。</p>		
担当科目	NGO・NPO 特論		
<p><b>大学院生さんへ期待すること</b></p> <p>NGO・NPOの活動に関心があるだけでなく、実際にNGO・NPOの活動に携わり問題意識を持っているみなさんも多いことと思います。講義では、開発途上国や日本の地方が抱えている課題について理解を深めるとともに、国際協力で用いられる分析手法を習得し、国際協力や日本の地方活性化に貢献できる知識と技術を習得します。演習では、NGO・NPOに関する各々が設定する研究課題と一緒に取り組んでいきたいと考えています。</p> <p><b>これまでの研究活動</b></p> <p>教育・人的資本蓄積による経済成長の研究、財政政策のシミュレーション分析 他</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. The Effect of Education Subsidies on Regional Economic Growth and Disparities in China, <i>Economic Modelling</i>, 27, pp.1061-1068, 2010.</li> <li>2. 日本における国債の削減と人的資本蓄積—異質な家計の存在する経済における一般均衡分析—, 柳原光芳氏との共著, <i>地域学研究</i>, 41, pp.867-881, 2011.</li> <li>3. ソリューションフォーカスによる同僚効果—組織文化の異なる4社の事例分析—, 2017年度 修了生松永朋子氏との共著, <i>山口県立大学大学院論集</i>, 18, pp.23-33, 2017.</li> <li>4. 山口県における留学生の雇用の可能性—企業アンケート調査分析—, 2018 年度修了生柳蘇賢氏との共著, <i>山口県立大学学術情報</i>, 11, pp.83-92, 2018.</li> </ol>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	鈴木 隆泰 (すずき たかやす)
	<p>バイクは排気量の大小やエンジンの型式によらず、そのマシンならではの楽しさがあると思います。たとえば、大きいのは高出力を味わえますし、小さいのはエンジンを回しきる楽しみがあります。また、マルチには爽快な吹け上がりがありますし、シングルやツインにはそれぞれ特有の鼓動がありますよね。他にも楽しみは盛りだくさん！バイク、ぜんぶ好きです。バイク、万歳！</p>		
担当科目	仏教文化特論		
<p><b>概要</b></p> <p>専門はインド哲学仏教学、宗教学です。手法は文献学です。</p> <p>文献学とは、文字資料・文献資料を用いた人間研究・文化研究です。文字は手段であり、研究対象は、どこまでも「人」「文化」であるところが大切です。</p> <p><b>資料のこと</b></p> <p>翻訳資料も有用ですが、最終的には「原典」以上の資料はありません。翻訳とは、翻訳者による原典の「一解釈」だからです。他人の解釈に全面的に依拠したままで、よりよい人間理解・文化理解はできません。</p> <p><b>主な研究業績</b></p> <p>①涅槃経系経典群の研究。主要な文献は、『大法鼓経』『大雲経』『央掘魔羅経』『涅槃経』『法華経』です。使用言語は、サンスクリット、仏教サンスクリット、チベット語、漢語です。</p> <p>②仏教を一つの文化体系と捉えた上で、「教義と儀礼」の関係を中心に、インド仏教（特にインド大乘仏教）の実像に迫る。主要な文献は『金光明経』で、使用言語は同上です。</p> <p>③仏教を「自分の問題」として受けとめ、「今、ここにいる自分に通じるメッセージ」を仏典から読み解く。主要な文献は、南伝上座部仏教が伝える仏典です。使用言語はパーリ語です。</p> <p style="text-align: center;"><a href="http://suzuki.ypu.jp/">http://suzuki.ypu.jp/</a></p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	西田 光一 (にしだ こういち)
	<p>東京生まれ。東京に住んでいた年月より、他の土地に住んできた年月の方が長いですが、今も山手線に乗っている時が一番、次の駅からの乗り換えと周囲の土地勘が働きます。</p> <p>3つの大学(院)で学び、今まで4つの大学に在職してきました。それに伴い、計16回、引っ越してきました。院生の皆さんには、専門的な勉強ではお手伝いできないかもしれませんが、勉強の環境整備については自分の経験を活かした話ができます。専門にこもりつつも世界を広げましょう。</p>		
担当科目	言語文化特講 II		
<p>言語学というと、少数民族の現地語を調べたり、音声について生理学的な実験を行ったり、コンピュータを駆使して大容量のデータを解析したりするイメージを持っている人もいるかもしれませんが、実際、そういう言語学の分野もありますが、私の授業では、身近にある現代英語や現代日本語の使い方を観察することが中心で、すぐに始められます。ことばに使われるのではなく、ことばを使うようになることで得られる利点を一定の知的訓練を通じて伝えていきたいです。</p> <p>どういう人が大学院進学に向くと思いますか。たとえ話で、次のケースを考えてみましょう。自分はイタリア文学に興味があり、大学の4年間では足りないので、院に進学したいと思っています。そこに、お金持ちの人が来て、「よし分かった。文学の研究におおいに励むが良い。ただし、イタリア文学ではなく、フランス文学を勉強するなら、学費を出そう」と言ってきました。どうしますか。「はい、分かりました」と言って、イタリア文学は諦めて、フランス文学で院に進学しますか。フランス文学専攻の院生になっても、夜は自室でイタリア文学の勉強を続けますか。「いえ、結構です。私はイタリア文学の道に進むので、自分で頑張ります」とお金持ちの人に断わりますか。それとも、その人に、「フランス文学よりイタリア文学の方が、あなたのためにもなるんだから、ぜひ自分のイタリア文学研究に協力してほしい」と説得を試みますか。</p> <p>私は、上記のどの選択をした人も大学院で勉強すると成果が出ると思います。ただ、こういうことを考えたことのある人が院に進学すると、専門的な勉強の意義が理解できるでしょう。</p> <p>言語学の分野では、文法と語用論に焦点をあてた授業になります。文法も語用論も実質的に初修の人にも分かるように授業を進めます。両方とも理論を背景にした分野なので、多少理屈めいたところがあります。はじめは取っつきにくいかもしれませんが、原則が分かると、自分で応用でき、オリジナルの研究が発表できるようになります。身近な題材から世界を相手に新発見を主張できる点が理論言語学の最大の売りです。もう一つ学問以外で、ことばの使い方を身につける利点を挙げておくと、大人になってからモテます。容姿と身体能力にモノを言わせられる時期は限られています。でも、モテたい気持ちは大人になってからの方が、ずっと真剣ですからね。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	西脇 靖洋 (にしわき やすひろ)
	<p>横浜市出身で、ポルトガルに 約5年間住んでいました。 散歩と旅行が趣味です。</p>		
担当科目	国 際 関 係 特 論		
<p>紛争を解決に導くにはどのようにしたらよいのか？国際協力を発展させるためにはいかなる手段があるか？国際難民の問題を解決するにはどのようにしたらよいのか？今日の国際社会には課題が山積しています。</p> <p>私の授業では、これらの課題について、国際関係論の諸理論を用いながら考察します。それにより、グローバルな視点から社会問題を理解する力や国際的な分野で活躍するための力を身につけてもらいます。</p> <p>国際政治について関心のある方はぜひ一緒に学びましょう。私自身は、特に EU に（欧州連合）について研究しているので、欧州諸国の政治に関心のある方は大歓迎です。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	菱岡 憲司 (ひしおか けんじ)
	<p>仕事でも趣味でも本を読むばかりだと、あまりに内向的で、世界が狭くなってしまいますから、意識して3年ごとに新しいことにチャレンジするようにしております。</p> <p>いまは、フルマラソンに挑戦中。3年目の今年は、サブ・フォー（4時間切り）を目指します。ちなみにフルマラソンの前は、ドラムを叩いておりました。次は、合気道が気になっています。</p>		
担当科目	日本文化特講Ⅲ		
<p>『南総里見八犬伝』で有名な江戸時代の戯作者曲亭馬琴と、その友人でもある小津久足を研究しております。馬琴はさておき、小津久足を知っている人は数少ないと思いますが、映画監督小津安二郎の先祖にあたるといえば、少しは親しみがわきますでしょうか。この小津久足、専門外の人にとっては「無名」の存在ですが、江戸時代の商人としては、当時指折りの蔵書家であったり、日本における近代的な批評のはじまりとも称されるやりとりを、馬琴とともに行ったことで知られております。そして、47点にもものぼる紀行文を残しており、生涯で7万首の和歌（多い年には、1年で8千首！）を詠みました。そんな小津久足の知られざる文事（文学・文化に関わる営み）を、未紹介の資料をこつこつと足で集めて研究してきました。そこから浮かび上がってきたのは、齒に衣着せぬ物言いで自由に自己主張を貫く、「個性」としか言いようのないパーソナリティーです。そして、そうした「個性」は、馬琴その人や著作物にも共通して見出せるものです。こうした興味深い事実を、文献を読み解くことで見出し、さらには、同じ19世紀に発達した、西洋の近代小説との比較も視野に、「個」「私」の自己表出がどのように変遷していったのかを明らかにしたいと考えています。なお2016年に、『小津久足の文事』（ペリかん社）として、これまでの研究成果をまとめて出版いたしました。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	水谷 由美子 (みづたに ゆみこ)
	<p>性格も行動もノマドタイプ。目下、趣味はセーリング。世界を陸からだけでなく海からも眺めてみると、新たな視点や空間の広がり生まれます。発想の転換をしつつ、ファッションから近未来のライフスタイルの提案を目指しています。エネルギー、環境、サステナビリティ、エイブルアートなどを踏まえつつも、常に夢見る力を養い、実現する行動力と直感力によって、創造する喜びを共有することに価値を見出したいと考えています。</p>		
担当科目	<p>文化コーディネート論 文化創造特講Ⅱ</p>		
<p>●大学院生に期待すること</p> <p>研究室では主に地域資源を生かした研究創作活動を中心に、地域と関わりながら地域ブランドの創造に向けた実践的研究を行っています。柳井縞×デニム、徳地手漉き和紙×ニット、帽子、衣服、インテリア小物などのデザイン開発を実践しています。</p> <p>是非、興味のある分野から地域ブランド造りやその広がりとして、まちづくりと一緒に創作研究しませんか？</p> <p>●これまでの研究活動</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 道化服飾の研究（西欧における職業的宮廷道化師、祝祭における道化、コン・メディア・デラルテやパントマイムなどの道化キャラクターの服飾の系譜について） ☆服飾美学会誌に多数掲載</li> <li>2. 地域資源を生かした服飾の商品開発など、地域ブランドのデザインを目指す（サビエルと大内文化など歴史文化、素材として柳井縞、徳地和紙、竹繊維そしてデニムなど使用）*</li> <li>3. 国際文化交流と服飾デザイン** フィンランドにおけるラップランド大学との共同研究 ナバラ州立大学との交流で、サビエルと大内文化に関するファッションショーを開催し、服飾文化の可能性を拡張する。</li> </ol> <p>*・** 山口県立大学研究報告にて実践研究を毎年執筆</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 著作 拙著（単）『毛利臣男の劇的空間－舞台・ファッション・アト－』 織研新聞社、2006年。 拙著（共）『ファッションの歴史－西洋服飾史－』 朝倉書店、2003年。 拙著（共）「サン・フェルミン祭」『スペイン文化史事典』 丸善、2010年。 拙著（共）『CREATIVE NOTE－文化をデザインする－』 東洋図書出版、2012</li> </ol>			

所属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏名	山口 光 (やまぐちひかる)
		<p>意味不明なスケッチを描いたり、 突然、木を切りはじめたり、 パソコンでCGつくったり、  勝手に楽しそうに生きています。</p>	
担当科目	文化創造特講 III 「プロダクトデザイン」		
<p><b>大学院生へ期待すること</b></p> <p>山口光研究室では、プロダクトデザイン（例えば日用品や雑貨・工業製品・工芸品・福祉機器などのデザイン）を主軸とした「社会に対する実現力」を養成しています。しかし、必ずしもそれだけではありません。他人に評価されることが前提ですが、面白いことは「何でもアリ」だと考えています。</p> <p>本気で「好きなことをカタチにする」人を歓迎しています。</p> <p><b>これまでの研究活動</b></p> <p>私は、元々は日用品メーカーで工業製品をデザインしていました。フリーランスになってからは、家具や伝統工芸品等も扱っています。結構、幅広いフィールドで仕事をしてきたと思います。</p> <p>最近では、地域に眠っている技術・文化を「見えるカタチにすること」が大事だと感じる様になりました。単にモノを作るだけではなく、社会に向けたデザイン研究・制作であることを心掛けています。</p> <p><b>ゼミ（授業）の様子</b></p> <p>少なくとも「見えるカタチ」にする力は必要ですので、基盤となるスキル（発想力・手仕事・デジタルスキル）の養成は必要です。ただ、大学院生に最も重要な能力は「実現力」だと思っています。</p> <p>学内での制作活動だけではなく、展示やデザインコンペのような学外活動にも積極的に参加しています。</p>			

所 属	国際文化学研究科 国際文化学専攻	氏 名	渡辺 滋 (わたなべ しげる)
	<p>横浜生まれの、横浜育ちです。</p> <p>大学の助手・助教、博物館の研究員などを経て、本学の日本史研究室に赴任しました。</p> <p>これまで、日本前近代の史科学（古典籍・古文書の研究）を中心に、地方行政史、日本漢文などについても研究してきました。</p> <p>最近は、山口県の歴史についても研究を進めています。</p>		
担当科目	日 本 文 化 特 講 II		
<p>「日本文化特講 II」は、その名称にもあるとおり、「日本文化」を学ぶことを目的とした授業です。日本文化を学ぶに当たっては色々なやり方が考えられますが、ここでは基本的に、私の専門分野に限定せず、毎年を受講生の皆さんの興味関心にも合わせて、広く様々な取り組みを行っています。たとえば県内の遺跡を見学に行くこともありますし、教室で様々なワークショップを実施する場合があります。また、巻物を実際に手にとって扱ってみたり、和紙を自分で漉いてみる、あるいは墨を自分で作ってみるなどの企画も、その一例です。こうした体験を積み重ねることで、日本文化の特質を体感してもらうのが本授業の趣旨といえるでしょう。</p>			